

京都大學人文科學研究所編

中國宗教文獻研究

臨川書店

清代における金蓋山龍門派の設立と『金華宗旨』

モニカ・エスポジト*

一、はじめに

先ごろ、『黄金の華の祕密』の英訳が電子文献の体裁でインターネット上に登場した。まず、この文献が轉生した最新の姿を、出版社がどのように提示しているのかを見てみよう。

この古代の深遠な祕傳の書は、八世紀になって一そろいの木版に記録されるまで、何世紀もの間口頭で伝えられてきた。この書は呂巖（或いは呂洞賓）を祖とする光の宗教の一員によって記された。呂祖はここに記される技法を使って八仙の一人になったとされている。その思想はペルシャとザラスシュトラ（ゾロアスター教）の傳統にまで遡ることができ、その根源はエジプトのヘルメス・トリスメギストスの錬金術の傳統にある。¹⁾

こうした解説は新しいのだが、インターネット上の文献自体は、ドイツの中國學者、リチャード・ウィルヘルムによる著名な翻譯、『黄金の華の祕密』の電子版にすぎない。良く知られているように、これは西洋で最初に翻譯された中國内丹文献である。この本は1929年に出版され、心理學者のカール・グスタフ・ユングの解説が寄せられた²⁾。この本

* 本稿を作成するにあつて様々なご助言をくださった麥谷邦夫教授、ウルス・アップ氏及び船山徹氏に對し、ここに謝意を表します。

1) “This ancient esoteric treatise was transmitted orally for centuries before being recorded on a series of wooden tablets in the eighth century. It was recorded by a member of the Religion of Light, whose leader was the Taoist adept Lu Yen (also known as Lu Yen and Lu “Guest of the Cavern”). It is said that Lu Tzu became one of the Eight Immortals using these methods. The ideas have been traced back to Persia and the Zarathustra tradition and its roots in the Egyptian Hermetic tradition.” <http://www.powells.com/cgi-bin/biblio?inkey=92-1932681787-0> を参照。

2) 『金華宗旨』は著名な内丹書で、その存在は1929年にリチャード・ウィルヘルムの翻譯を通じて西洋に知られることとなる。この翻譯は、*Das Geheimnis der Goldenen Blüte: ein chinesisches Lebensbuch* というタイトルで出版され、カール・グスタフ・ユングの解説が寄せられている。ウィルヘルムが底本として使用したのは1921年に出版された湛然慧眞子本で、これは、譯者本人が説明しているように、書店と古物商でひしめく北京の琉璃廠で發見された。

は西洋で大きな成功を収め、何度も再校され再版されている。また、様々な言語に翻譯されて世界中に紹介され、日本や中國でも、このウィルヘルム版は翻譯、紹介されたのである³⁾。

インターネット上の解説は、この文獻を中國で八仙のうちで呂洞賓と「光の宗教」という謎の宗教とに關係する、深遠な祕傳の書である、としている。さらに、ゾロアスター教の開祖、ゾロアスターやエジプト錬金術の傳説的な創始者、ヘルメス・トリスメギストスとも関わっているという。これもウィルヘルムの考えだったのであろうか？

序の部分で、ウィルヘルムはこの文獻を見た時のことを語っている。この中國のテキストは、その稱するところによれば、呂洞賓によって記されたものである。ウィルヘルムによれば、呂洞賓は八世紀の人物で、後に民間傳承の中で八仙に列せられたのだという。呂は796年頃に生まれ、所謂金丹教を起こしたのだ、とウィルヘルムは主張している。この金丹教が、ウィルヘルムの目には、練丹の新しい解釋を打ち立てた、唐代から續く祕傳で祕密の宗教として映ったのである。この「新しいタイプの練丹術」の中では、練丹の材料は、もはや、不死の藥、エリクシルを製造するための物質的素材ではなく、心理作用の象徴となったのだ、とウィルヘルムは説明する。これが、解説を寄せるほどにまで、ユングがこの書物に興味をもった主な理由の一つであった。ウィルヘルムは、この「新しいタイプの練丹術」を、諸説統合的に描き出している。日本人研究者であった佐伯好郎(1871～1965)の著作、『景教碑文研究』に感銘を受けていたウィルヘルムは、呂洞賓とキリスト教ネストリウス派との間に關連を見出したのである。こうして、呂の教えはペルシャの光の宗教(いわゆるネストリウス教)とも關連づけられることになった。

さて、以上はウィルヘルムが思い描いた幻想的な歴史であるが、今度はこの文獻の本當の起源と歴史を見てみることにしよう。

二、7種のテキスト

管見によれば、この文獻には、以下の7種類のテキストが存在している⁴⁾。

(1) 清・邵志琳(1748～1810)編『呂祖全書』[64卷、27冊、1775年]第49卷(第23冊)『先天虛無太乙金華宗旨』

3) 英譯版：Translation by C. F. Baynes, *The Secret of the Golden Flower: A Chinese Book of Life* (London: Kegan Paul, Trench, Trubner and Co, 1931). 日本語版：湯淺泰雄、定方昭夫譯『黄金の華の祕密』人文書院、1973年(2004年再版)。中國語版：通仙仙譯『金華養生祕旨與分析心理學』新華書店、1993年。

4) これらの版本に關する研究については、以下の論文を参照されたい。森由利亞『『太乙金華宗旨』の

- (2) 清・陳謀編／修補『呂祖全書宗正』18卷(9冊)、1852年[彭啟豐(1701～1784)によってまとめられた『全書宗正』18巻から派生したもの]、第10巻(第7冊)『先天虛無太乙金華宗旨』
- (3) 清・蔣元庭(予蒲、1756～1819)編『全書正宗』18巻、1803年、第2巻『孚佑上帝天仙金華宗旨』
- (4) 清・蔣元庭(予蒲、1756～1819)編『道藏輯要』(室集2)、ca. 1796～1819年『金華宗旨』。また再版されたものとして、清・賀龍驥、彭瀚然、閻永和編『重刊道藏輯要』(二仙菴、1906年)がある。⁵⁾
- (5) 清・閔一得(1748～1836)編『道藏續編』23種(4冊)、1834年、第1種(第1冊)『呂祖師先天虛無太一金華宗旨』
- (6) 姚濟蒼(合道子)編印『太乙金華宗旨』書名爲『長生術』、1917年
- (7) 湛然慧眞子編印並注『太乙金華宗旨』書名爲『長生術續命方合刊』、1921年⁶⁾

以上の全ての版本において、この『金華宗旨』という文獻は、效果的に、神仙・呂洞賓

↘ 成立と變遷』『東洋の思想と宗教』15號、1998、43～64頁所收、「呂洞賓と全眞教—清朝湖州金蓋山の事例を中心に」(野口鐵郎編『講座道教第1巻—道教の神々と經典』、242～264頁所收) 雄山閣、1999年、「Identity and Lineage.” In L. Kohn and H. Roth eds., *Daoist Identity*, pp. 165-184 (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2000) 及び Monica Esposito, *La Porte du Dragon-L'école Longmen du Mount Jin'gai et ses pratiques alchimiques d'après le Daozang xubian (Suite au canon taoïste)*, Ph.D diss., Université de Paris VII, 1993; “Il Segreto del Fiore d'Oro e la tradizione Longmen del Monte Jin'gai.” In P. Corradini ed., *Conoscenza e interpretazione della civiltà cinese*, pp. 151-169 (Venezia: Cafoscarina, 1996); “The Different Versions of the Secret of the Golden Flower and Their Relationship with the Longmen School,” *Transactions of the International Conference of Eastern Studies* 43 (1998) : pp. 90-110; 「龍門派與『金華宗旨』版本來源」道教文化研究會にての發表演文(早稻田大學、1999年); “Longmen Taoism in Qing China: Doctrinal Ideal and Local Reality,” *Journal of Chinese Religions* 29 (2001) : pp. 191-221 (特に pp. 203-207, 213-221).

- 5) 『道藏輯要』と『重刊道藏輯要』に収録される版本には、書名の後に「孚佑上帝純陽呂祖天師著」と記されているが、「道藏輯要總目」に所収される、蔣元庭本の『道藏輯要』の目録(『道藏精華錄』上、5a所收)では、「天師」の代わりに「天仙」と記されている。『道藏輯要』の版本については森由利亞「道藏輯要と蔣豫蒲の呂祖扶乩信仰」『東方宗教』98號、2001、33～53頁を参照されたい。本論文では、パリのコレッジ・ド・フランスの圖書館に所蔵されている蔣元庭本及び臺灣の新聞出版社刊の『重刊道藏輯要』(第12冊)を参照している。
- 6) この最終版については、その作成年代と編集者の名前に關していくつかの問題點がある。1921年という年代は、湛然慧眞子の序に對應するが、1927年という年代はこの版の實際の出版年、ないしは再版年であると思われる。ウィルヘルムが使用した版には出版年代も出版社も記されていない。ニーダムは、この版本を1968年、ベッラージオでの道教學會の際に、目幸默僊博士を通じて手に入れている。こ↗

の作に歸されている。更に、最初の三つのテキストは、所謂『呂祖全書』の中に含まれているのである。しかし、1744年、劉體恕によって32巻本として出された『呂祖全書』の最初の版本には、『金華宗旨』は収められていない。『金華宗旨』が出版されるのは、1775年になってから、邵志琳の手による改訂版『呂祖全書』64巻においてであった。

三、邵志琳本と太乙法派

邵志琳の序によると、『金華宗旨』は、蘇州の呉氏の寫本に由來する⁷⁾。この書物は、淨明祖師の許遜から口傳されてきたものの成果である、と言われている⁸⁾。この口傳は、1668年、江蘇の毘陵壇において、淨明道に屬する7人に與えられた。この時、著名な全眞教の眞人、邱處機と譚處端と共に、神仙・呂洞賓が降壇したと言う⁹⁾。しかし、「降壇」とはいったいどういうことなのであろうか。「扶乩」または「飛鸞」はもともと一般的な占いの一つで、明清期には、高級官僚、文人、そして一般人の間でも行われていた。1663年にヨーロッパで出されたある本は、こうした活動を「これ以上一般的なものはないくら

→ の湛然慧眞子の版本はウィルヘルムが翻譯にあたって使用したものである。資料のコピーを郵送してくれた、ニーダム研究所の圖書館司書、ジョン・モフエット氏に謝意を表す。Joseph Needham and Lu Gwei-djen eds., *Science and Civilisation* (Cambridge: Cambridge University Press, 1983) V.5, p. 244, note c を参照されたい。湛然慧眞子編印並註『太乙金華宗旨』の翻譯についてはMiyuki Mokusen, *Kreisen des Lichtes, Die Erfahrung der Goldenen Blüte* (Weilheim: Otto Wilhelm Barth, 1972) を参照されたい。

- 7) 添付資料A-1に載せた原文テキストの序を参照されたい。『金華宗旨』の傳來に關する重要な箇所を太字にして記した。
- 8) もともとは、淨明道の祖師である許遜が斗中孝悌王から授けられた口傳に關係していると言われている。斗中孝悌王には孝仙王（日）と孝明王（月）という2人の兄弟がいるとされており、この2人が蘭公に道教的宇宙觀を開示したとされている。K. Schipper, "Taoist Ritual and Local Cults." In M. Strickmann ed., *Tantric and Taoist Studies*, pp. 812-834 (Bruxelles: Institut Belge des Hautes Etudes, 1985), p. 819を参照。
- 9) 潘乾徳を含む、淨明道に所屬する7人が最初にこの口傳を傳えられたのは、1668年だといわれている。潘乾徳による序（「潘易菴太乙金華宗旨原序」9a～10a）も参照されたい。この最初の啓示に關しては、添付資料Aに掲載した他の弟子たちによる序、及び森由利亞による研究、森由利亞「『太乙金華宗旨』の成立と變遷」45～51頁も参考に付されたい。莊惺菴の序（14a～15a、特に14a）と屠宇菴の序（15b～17a、特に16a）によれば、最初に口傳を授かった7人が、靈的自動書記を行う毘陵の周堃鶴壇に集まったのは1666年頃であったとされている。森氏はこの時の扶乩壇はおそらく白龍精舎であったろうと推測している。Mori Yuria, "Identity and Lineage," p. 167を参照されたい。

いに一般的である」と評している¹⁰⁾。そして、今日の香港や臺灣でも未だに流行しているのである¹¹⁾。神仙や過去の著名な真人・道士・大仙師たちが「乩架」と呼ばれる靈的自動書記のための道具に降りてくると、今も昔も信じられている。媒介者によって支えられている、彫刻を施された木製の棒が、「乩盤」または「砂盤」と呼ばれる砂で覆われた皿の上に自動的に文字を描き出していく。明清期の道教文献のほとんどは、まさにこのようにして啓示されてきたのである。そして、恐らく、『金華宗旨』の原本もまた、このようにして記されたのであろう。

しかし、邵志琳が序で語るように、呂洞賓の2回目の降壇の後、屠乾元が全ての教えを記録し¹²⁾、張坎眞にゆだねてその記録を修正し、校正して本の體裁に整えたのは、1692年になってからのことであった¹³⁾。この本は、もともと20章から成り立っており¹⁴⁾、譚處端真人のお告げから始まる。譚處端は門弟たちに五則の教えを垂れたが、添付資料A、附1で確認できるように、そのうちの四つ、(a)開宗闡教 (b)淨明源流 (c)太乙法派 (d)戒律、だけしか今日に伝えられていない¹⁵⁾。乩壇の弟子たちに對し、『金華宗旨』の教えは許遜に始まるということについて念を押しした後、譚眞人は淨明道の歴史を、次のように明らかに

- 10) Christoph Arnold, "Auserlesene Zugaben von den Asiatischen Africanischen und Americanischen Religions-sachen so in XL Capitel verfaßt. Alles mit einem nothwendigen Register." In *Abraham Rogers Offne Thür zu dem verborgenen Heydenthum*, pp. 537-998 (Nürnberg: Johann Andreas Endrers, 1663), p. 606 を参照されたい。
- 11) 今日の香港や臺灣における、靈的自動書記及び諸神への信仰を中心とした宗教團體に關しては、志賀市子とフィリップ・クラートの研究以上に参考になるものを讀者に提示することはできない。
- 12) 屠宇菴の序の中で、屠は、自身がどのように乩壇の弟子として認められたかについて説明を施している。先ず最初に、彼は「淨明忠孝録」というテキストを授かっている。その後、靈的自動書記を通じて、呂洞賓から直接的に入會儀禮を受けるのである。Mori Yuria, "Identity and Lineage," p. 169 を参照。
- 13) 1692年後半には、運命的に口傳を伝えられた最初の7人が既に逝去したり四散していたため、淨明宗旨の流傳は別の7人に對して行われた。この時は、古紅梅閣の毘陵壇において教えが開示されたと言われている。毘陵に設置された紅梅閣については、金蓋山で『金華宗旨』を伝えられた7人のうちの1人である、謝凝素の傳記(『金蓋心燈』卷3、3a、2~3行)に述べられている。この紅梅閣は北宗と南宗の統一を果たした陳致虛(上陽子、1290~?)を始めとする南宗祖師張紫陽らの代と關係がある。
- 14) この本には、神仙や真人による序や、教えを授かった弟子たちによる序がつけられた、呂祖師から伝えられた教えの記録が含まれていた。(添付資料を参照されたい。)Mori Yuria "Identity and Lineage" (pp. 167-168) では、潘乾德による序が一部翻譯されている。そこでは、弟子たちが數ヶ月にわたって、繰り返し呂洞賓に定義を質問し続けることにより、徐々にテキストが製作されていたことが述べられている。
- 15) 残念ながら、添付資料の『金華宗旨』に見られる譚眞人と邱眞人による教示の内容が、張坎眞によるオリジナルと同じであるのか、或は、邵志琳によって編纂され改定されたものであるのかは、定かではない。

にしている。

再七代、有玉眞、中黃兩先生繼之。今又失其傳，故吾特爲演出，即《宗旨》是也。
（「淨明源流」『譚真人垂示五則』）

七代の後、玉眞（つまり劉玉〔1257～1310〕）と中黃（つまり黄元吉〔1270～1325〕）の兩先生が（許遜の）教えを繼いだ。今、又その傳承が失われたので私が特に提示する。すなわち、『〔金華〕宗旨』がそれである。

つまり、淨明道の失われた傳統を蘇らせるために、『金華宗旨』は啓示されたのである¹⁶⁾。更に譚真人は、新しい宗派が形成されたということを説明している。

真人曰：“金華太乙之傳，另有宗派，以純陽聖祖爲第一代開宗大道師。此三教中大綱領，仙釋中眞骨髓也。在壇弟子，俱依乾坎艮震，巽離坤兌爲次。”（「太乙法派」『譚真人垂示五則』）

譚真人は言った。「金華太乙の傳承は、純陽聖祖（つまり呂洞賓）を第一代開宗の大道師とする別の宗派がある。これは、三教の中の大綱領にして、神仙の教えと釋迦の教えの眞髓である。この壇の弟子たちは、乾坎艮震、巽離坤兌の順に（派名をつけるべきである。）」

「金華太乙の教え」を受けた門弟たちは、こうして、八卦から一字取った派名を與えられた。例えば『金華宗旨』を授かった初代の門弟たちは、屠乾元のように乾の字がつけられており、この字によって彼等が第1代目に所屬していることがわかるようになっているのである。第2代に所屬する人々の名前は、張坎眞のように坎の一字が入れられている。このようにして代々派名がつけられてく。太乙法派（つまり太乙金華法派）に入信した人々は、こうした派名を授かった後、呂洞賓から宗旨を授かる。そして最後に邱處機から

16) 良く知られているように、淨明道は、南昌（江西）で起こった儀禮的、地域的な傳統であり、唐代には孝道として知られていた。晉代に許遜によって開かれ、靈寶の儀禮と關係していたと伝えられている。實際、唐末の道士である杜光庭は、孝道と靈寶の傳統は殆ど變わらないと斷言している。Richard Shek, “Daoism and Orthodoxy.” In Liu Kwang-Ching & R. Shek eds., *Heterodoxy in Late Imperial China*, pp. 139-171 (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2004), p. 146 を参照。朝廷の庇護を受けた宋・元期には、劉玉（玉眞子）とその繼承者である黄元吉（中黃）に引き續き、淨明忠孝道の名で、當時最も重要な流派の一つとなる。この流派の主要な研究としては、以下を参照されたい。秋月觀暎、『中國近世道教の形成—淨明道の基礎的研究』、創文社、1973年及び同氏、「淨明道形成論考—中國における最近の研究成果を讀んで」（『東方宗教』78號、1991、23～44頁所収）。

指導を受ける。邱真人による二則の訓示が示すように、邱真人はたくさん暗誦文や祈祷文などを含む特別な儀禮を教えている¹⁷⁾。

編者である邵志琳は、添付資料A-1に載せてある序の中で、次のように強調する。「宗旨」というタイトルにも関わらず、呂洞賓の教えは2番目に位置している、つまり、譚真人の教えより後に位置している、と。こうした配置が、読者を文献の内容と違う方向に導いてしまうかもしれない、或いはこの書物を「金華宗旨」ならぬ「金華科儀」であるかのように勘違いさせてしまうかもしれない。そう心配した邵志琳は、書物の體裁を修正し、章を20から13に減らした。また、邱真人と譚真人による教示は、附1と附2のように、最後に添えられることとなったのだ。言い換えるなら、現在我々に伝わっている『金華宗旨』が全て13巻本という體裁であるということは、邵志琳の編纂という介入が有ったからだといえるのである¹⁸⁾。

さて、ここまでの、邵志琳の手による『金華宗旨』の第1種本についての話をまとめるにあたり、『金華宗旨』の教えは、元來淨明道に所屬する人々に伝えられたものであったという事實に、もう一度注目していただきたい。添付資料A-1に挙げた序の中で邵志琳自身が注意を喚起しているように、この淨明道の系譜は「南北全眞教のいずれの宗派」にも屬していない。また、我々は、この教えの受領者たちが新たな宗派である太乙法派を設立したことを見てきた。この宗派の起源は淨明道とその祖師である許遜への崇拜に求めることができる。しかし、この新しい系譜の中では、呂洞賓こそが開宗の祖師とされているのである。宗旨を授かる前に、この壇の弟子たちは派名を授けられている。その後、邱處機から宗教的修行方法と儀禮についての指導を受けていた。そして、編者の邵志琳は、これ

17) 太乙法派の傳戒を受けた人々は、ある特別な戒律を尊重せねばならないことになっており、その規律は、譚真人の「戒律」の第4番目に簡潔に上げられているものである、という事實は、ここに述べておくべきであろう。更に、「行持」と「授記」に含められている邱處機の垂示の中には、これらの人々に提示された特別な祈祷文がある。それは暗誦文の集合であり、諷誦すべきものの中には、次のようなものが含まれる。「太上感應鴻文」のような、善行を積むことを重視している道徳的文章、「斗母心咒」や「天皇心咒」のような日常的祈願文。更に、「天尊寶號」、「九佛寶號」、「天君寶號」のような、諸神の名前を列擧し諷誦することも含まれている。「行持」(『呂祖全書』、卷49、27b～29b)及び添付資料Aを参照されたい。

18) 『金華宗旨』に寄せられている邵志琳の序と目録によれば、20章からなる張坎眞のオリジナル版には、もともと以下のようなものが含まれていた。1-5章：『譚真人垂示五則』、6-18章：『太乙金華宗旨』、19-20章：『邱真人垂示二則』。

ら、傳度儀禮 (initiation/ordination) を「金華科儀」と呼んでいた¹⁹⁾。邵志琳の意圖は明確である。彼は、この文獻を、呂洞賓によって伝えられた道教の宗旨、分派的で科儀的な修練から解き放たれた宗旨として提示しようとしたのである。しかし、これから見ていくように、このような目的を心に抱いていた編者は、邵志琳だけではなかったのだ。

四、陳謀本と金華嗣派

特定の地域の毘陵壇と結びつき、分派的で科儀的な内容を削除しようとする動きは、陳謀による『呂祖全書宗正』に含まれる『金華宗旨』第2種本においても續いていた。現在も京都の大谷大學圖書館に所蔵されているこのテキストは、1852年、呂洞賓の信者たちと地元の廟の協力を得て、陳謀によって復元されたものである²⁰⁾。この書は、江蘇地方に流布していた、清代の學者、彭啟豐 (1701~1784) によってまとめられた『全書宗正』18巻から派生したものである²¹⁾。この『呂祖全書宗正』の版本は、呂洞賓を信仰する高官によって保護保管されていた。出版は1852年であったが、『全書宗正』という書名自體はすでに1747年、翰林院の一員が2人の高官から版本を彫るよう求められる時点で知られていた。以上のことは、1803年の蔣元庭本がこの陳謀本に基づいていると言われることと、私が蔣元庭本を陳謀本の後に挙げていることへの説明となる。

この陳本では、毘陵壇の弟子たちを示す「淨明嗣派」という呼稱は、「金華嗣派」に變

19) 「傳度」という用語は、中世道教徒の受籙儀式の一部としての、經典の傳授を意味している。(田中文雄「傳度儀禮」『道教の教團と儀禮』野口鐵郎等編、雄山閣出版、2005、285~297頁参照。) 英語では、この用語は、しばしば「transmission」、より正式には、儀式との關連から「ordination」ないしは「initiation」と譯される。『太上出家傳度儀』(『正統道藏』1236) 及び K. Schipper & F. Verellen eds, *The Taoist Canon*, vol. 2, p. 995 及び vol. 1, pp. 507-508 を参照。道教徒の受籙儀式に關しては A. Seidel, "Imperial Treasures and Taoist Sacraments: Taoist Roots in the Apocrypha." In M. Strickmann ed., *Tantric and Taoist Studies in Honour of R. A. Stein*, vol. 2, pp. 291-371 (Brussels: Institute Belge des Hautes Etudes Chinoises, 1983) を参照されたい。

20) 「修補全書記」の中で陳謀は、この版の版本の歴史と、彼が呂洞賓信仰のネットワークの經濟的援助によって、どうやって最終的に版本を復元したかについて述べている。

21) これは、江寧出身の顧晴崖なる人物によって彫られた。「凡例」及び陳謀、「修補全書記」(『全書宗正』巻1、1a) を参照。「修補全書記」の中で、陳謀は、「『全書宗正』は彭氏の舊本なり」と述べている(全書宗正長州彭氏舊本也)。彭啟豐は、長州出身の學者であり、1775年の邵志琳の編纂に關わった人物である。邵志琳、『呂祖全書』に寄せられた、彭啟豐及び王履階の序を参照されたい。陳謀も、「修補全書記」(1857、『全書宗正』巻1、1a) の中で、「金華闡幽」の編纂に關わった邱通宵なる人物が、陳謀より前、1757年頃に、彭啟豐本を元にした『呂祖全書』を出版したがっていた、ということを書いてある。彭啟豐は『歷朝聖賢名儒人物全圖』や『芝庭先生集』などの編者でもある。

えられている。しかし、太乙金華の省略形である金華という法派についての説明は、加えられていない。添付資料には、譚真人の垂示のうち、たった二つだけが含まれている。「開宗闡教」と「太乙金華源流」である（添付資料B参照）。淨明道の流傳が絶えたことを述べた後、譚真人の記録には、ただ、「1668年に呂洞賓が宗旨を開示し、太乙金華という呼稱に變えた」と付け加えられているのみである。呂洞賓を祖師とする、太乙金華派成立の歴史と彼の弟子に送られた名前は、この派で行われていた儀禮に関する言及と共に、完全に削除されている。しかし、邵志琳本とは對照的に、陳謀の「凡例」は、太乙金華派の流傳が斗宮から枝分かれしたこと、また『金華宗旨』の別傳であるだけでなく（「金華宗旨乃斗中教外別傳」）、『忠孝諸誥』と題された一まとまりのテキストとも関係があること（「太乙金華法派傳自斗宮、原本忠孝、立言正大。劉邵本所刊忠孝諸誥」）を述べている。この一群のテキストは、劉體恕本及び邵志琳本の『呂祖全書』に見られるが、そこには、「太乙金華派」との提携に関する記述は一切見受けられない。つまり、陳謀本では、所謂太乙金華派は、元來「忠孝」のテキストの流傳と関係があるとされているが、淨明道との提携は影が薄いように見受けられるのである。それどころか、派詩もなければ科儀もなく、何よりも乩壇の所在地すら特定されていない。毘陵壇や、こうした教示が起きた時期などに關する言及は全て除かれており、また、壇の門弟による序すらないのである²²⁾。

また、陳謀本では、『金華宗旨』の第13章の後に、「金華闡幽」という別のテキストを含めている。この「金華闡幽」は、今のところ未出版の邱通宵による序の中で、『金華宗旨』が啓示された後、その奥祕を説明する目的で製作された經典として紹介されている。このテキストは、『金華宗旨』の修行に關するはつきりとしなない教義についての説明を求めため、仙人・呂洞賓に向けて發せられた質問と、それに對する答えという質疑應答で成り立っている。これは、おそらく、毘陵壇に集まった最初の7人によって、今は削除されてしまった序の中に記されていた、扶乩を通じたコミュニケーションの成果である。このテキストの中軸は、1668年に起こったとされている、呂洞賓の最初の啓示の間に形作られたのだろうが、更なる調査・研究が必要であったのだろう²³⁾。

22) 本來の編者である彭啟豐が、これらの毘陵壇が作られた長州（江蘇）の出身であることは興味深い。

23) 毘陵の周埜鶴壇に集まった人々がどのように啓示を授かったかについて記している潘乾徳の序の中で、呂洞賓の教えは、日月を費やして製作されたことが述べられている。（邵志琳『呂祖全書』卷49、序9a。一部は、Mori Yuria, "Identity and Lineage," p. 167で翻譯されている。）森氏がすでに指摘しているように（上掲論文、pp. 167-168）、『金華宗旨』の製作は、呂仙人と弟子たちの間の、質疑應答を記録するという形で始まっている。この會話の記録が、現在陳本に收められている『金華幽問』（及び「金華闡幽問答」という題名で『道藏輯要』にも收められているもの）かもしれない。

五、蔣元庭本と天仙派

この『金華宗旨』の第3種本と第4種本は、『全書正宗』と『道藏輯要』という二つのコレクションに収められている。どちらも蔣元庭(1756～1819)という同じ編者によって編纂されたものである。蔣元庭の『全書正宗』の凡例から分かるように、この集は『(全書)宗正』の原本をもとに改訂したものであり(注27も参照)、その際に、『(呂祖)全書』や劉體恕の32巻本、邵志琳の64巻本及び各種の道典やその他の資料を廣く調査して増添したのである。(是集係就《宗正》原本重訂、恭檢《全書》、劉體恕所刻三十二卷、邵志琳所刻六十四卷、及各道典、竝志集石刻、一一查校、採補増添。)同じ凡例の部分で、蔣元庭は次のように述べている。

《金華宗旨》、後教外別傳、天仙的派、非僅淨明之道、如《宗教錄》等書也。學者非伐毛洗髓、深得金丹三昧者、未必能知此書之妙也。(「凡例」『全書正宗』)

後の、教外の別傳によれば、『金華宗旨』は天仙派に屬していた。『(淨明)宗教錄』などの書籍のように²⁴⁾、淨明道だけのための文獻ではないのだ。古き己を改善し金丹の三昧を深く得ていない徒弟は、必ずしも、この書の神妙な教えを知りえないであろう。

以前の二つのテキスト(即ち邵志琳本と陳謀本)と比べると、第3種本と第4種本のテキストは更に一步進んだといえる。ここでは、新しい、「天仙派」と言う流派が紹介されているのだ。天仙派と『金華宗旨』という文獻の役割は、次のように規定される。

金華之關於道妙者固鉅、而深得宗旨則爲尤鮮。此非天仙之傳不足以明之、更非天仙道祖不克以示茲妙典也。(志秋「天仙太乙金華宗旨後跋」)

『金華』が道の玄妙な教えに関わることは固(もと)より大であるが、その宗旨を深く理解できるものは殆どいない。此れは天仙の傳承なくしては決して明らかにならず、また、天仙道の祖(つまり呂洞賓)にあらずしてこの玄妙な典籍を示すことができる者はない。²⁵⁾

結果的に、蔣元庭の手による第3、第4種本においては、本の書名すら變わり、天仙派の『金華宗旨』という意味で『天仙金華宗旨』とされているのである。この新しい書名は、呂洞賓が、今や、天仙派という新しい宗派の單なる開宗の祖師であるだけでなく、門弟たち

24) 『淨明宗教錄』の本については後掲注38を参照されたい。

25) 森の翻譯(Mori Yuria, "Identity and Lineage"), p. 174も参照されたい。

にその教えの宗旨を開示できるたった1人の人物であるという事実を表現している。この宗派に関する更なる情報は、蔣元庭の弟子である志秋によって書かれた後跋に見ることができる。

因思孚佑帝君名天仙派，必有留傳字句。詢之惠覺，蒙敬述云：“昔聞有二十字曰：寂然無一物，妙合於先天，元陽復本位，獨步玉京仙。”（志秋「天仙太乙金華宗旨後跋」）

思うに孚佑帝君（つまり呂祖）が天仙派を命名した時、必ずや字句が一緒に伝えられたはずである。惠覺（つまり蔣元庭）にこのことを尋ねたところ、彼はうやうやしくこう述べた。「以前に二十字から成る詩句を聞いたことがある。（それは次のように言う。）「寂然無一物，妙合於先天，元陽復本位，獨步玉京仙」と。」

ここに登場する詩句は、天仙派の派詩のことを指している。この詩句には、次のような教訓が續けられている。

并告小子志秋曰：“（…）我孚佑帝師天仙之始祖也，宏教恩師天仙之二祖也。子其敬誌之。”（志秋「天仙太乙金華宗旨後跋」）

あわせて私、志秋に告げて言われた。「（…）我らの孚佑帝師は天仙派の始祖であり、宏教恩師（柳守元）は天仙の第二祖である。そなたはこのことを、つつしんで覚えておくがよい。」²⁶⁾

上の引用に見られるように、編者である蔣元庭（ここでは惠覺と記されている）は、天仙派と関係があった²⁷⁾。彼こそが、弟子の志秋に天仙派の派詩を傳えた人物なのである。

26) このくだりは、すでに森による翻譯が存在する。Mori Yuria, “Identity and Lineage,” pp. 173-74.

27) 實際、天仙派の徒弟として、蔣元庭は『金華宗旨』13章の終わりに、次のような最後の注を付け加えている。

謹按此經乃性命兼修，天仙之的傳也。（…）孚佑帝師大佈慈悲，普施法力，將天仙妙道，於此處拈出。（…）《宗正》本係仍屠子之舊。今《宗正》本詳爲釐定，歸入集中，以質後之天仙嗣派者。廣化弟子惠覺謹誌。

謹んで考えるに、この經は性と命を兼修することを説いており、天仙〔派〕の正しい傳承である。…孚佑帝師（呂洞賓）は、廣く慈悲をいきわたらせ、至る所に法力を行い、天仙の妙道をここに捻出した。『（全書）宗正』版は、屠〔字菴〕の舊版のままである。今日、『（全書）宗正』は詳細に對照され整理され、この全集の中に收められ、それによって後世の天仙嗣派を定めるものである。廣化の弟子、惠覺が謹んで記した。

この宗派では、呂祖を始祖として、また宏教恩師（柳守元）を二祖として祭っている²⁸⁾。最近の森由利亞の研究によって、蔣元庭が北京に覺源壇または第一開化壇として知られる、神靈が降臨して自動書記を行う扶乩壇を設立した高官であるということが明らかになっている。この扶乩壇での靈示こそが、『全書正宗』と清代の重要な道教經典である『道藏輯要』の編纂の源泉であったのだ²⁹⁾。乩壇を開設することと、そこで行われる扶乩を通じて宗教的な書物を生産し、また廣めていくという活動は、清代道教の活動の中心となるものであった。

さて、蔣元庭の乩壇については、彼のこうした宗教的活動が、白雲觀として知られる北京の全眞教系十方叢林においても認められていたということが知られている。實際、先に紹介した天仙派の派詩は、『諸眞宗派總簿』に挙げられている。この文書は白雲觀に所藏されていたもので、1927年、日本人學者の小柳司氣太によって書寫され、彼の『白雲觀志』（96頁）に収められている³⁰⁾。この派詩は純陽派のところに列せられている。純陽派は、白雲觀とその全眞系叢林において呂洞賓の法脈の一つであると認識されていた宗派である³¹⁾。ここでこれまで述べてきた『金華宗旨』の最初の4種版本に関する重要な点をもう一度振り返っておきたい。

（一）『金華宗旨』は、元來、江蘇の太乙金華派の徒弟たちの毘陵壇において、1668年に起こった扶乩による啓示の成果であるとされていた。

（二）1692年、2回目の靈示の後、屠乾元によって記録され、張坎眞によって編集された。この時点では20章から成り立っていた。

28) 柳守元は、龍門派の傳戒と全眞教の儀禮全般に関わる『道藏輯要』の中の、重要なテキストに權威を與えた傳説的祖師である。特に、彼の名前は、傳戒の最終段階である天仙大戒の内容を伝えるテキストに関連している。森由利亞「清朝全眞教の傳戒と呂祖扶乩信仰」（福井文雅博士頌壽記念論集『アジア文化の思想と儀禮』春秋社、2005年）を参照。柳守元が自身の所屬する宗派を表すのに、（白雲觀に記されている宗派名である）純陽の變わりに、天仙という表現を使っているのは、王崑陽祖師によって再興された傳戒の手順の中で、この天仙大戒が中核になっていることを示すための、故意の選擇なのであろうか。

29) この壇の設立と、『道藏輯要』との関わりについては、Mori Yuria, "Identity and Lineage," pp. 172-175 及び、同氏「道藏輯要と蔣豫藩の呂祖扶乩信仰」を参照されたい。

30) 小柳司氣太『白雲觀志』（東方文化學院東京研究所、1934年）91～121頁を参照。同様のリストが五十嵐賢隆によって「宗派別」という名前で出版されている。五十嵐賢隆、『太清宮志』國書刊行會、1986年（1938年第1版）、77～108頁。

31) 『太清宮志』91頁参照。この純陽派は、呂洞賓によって開かれたといわれている天仙派という名前の別の宗派に繼承されている。しかし、ここで天仙派の派詩は、蔣元庭がその弟子に傳えた純陽派の派詩とは異なっている。蔣元庭の「天仙派」は「天仙大戒」と関係があるかもしれない。上注28参照。

(三) 1775年、邵志琳の編纂を経て、『金華宗旨』は呂洞賓による宗旨だけを提供する13章構成となった。呂祖を祭り、呂洞賓信仰こそが道教という表現であると考えていた高官・文人たちの間に流布したのは、この13章形態のテキストであった。恐らく、邵志琳や陳謀のような編者は、このような意見を持っていたと思われる。

(四) 1803年に、蔣元庭が呂洞賓信仰を、全真道系にも認められた天仙派に属する扶乩壇の設立と連合させた。

(五) 天仙派は『太乙金華（派の）宗旨』という元々の書名を私的に活用し、『天仙（派の）金華宗旨』に變えた。これによって、扶乩による『金華宗旨』の文獻の拜受とその流布のための、太乙金華派と同等な權威が示された。

(六) 第3、第4種本の編者である蔣元庭の主張は、「全真道の正統な道士である」と認識されていた天仙派の徒弟たちと、淨明道に属する太乙金華派の徒弟たちとの間の継続的な競争の跡を示している。後者の系譜は「全真教南北のいずれの宗派」とも違うものとして示されていた。蔣元庭は、次のように示唆している。『金華宗旨』は太乙金華派の文獻で、もともとは『淨明宗教録』など、淨明道の文獻に収められていたのであろう、と。これらの文獻は、淨明道とその分派によって獨占的に所持されていた。天仙派の人々が反感をいだいたであろうと思われるのは、こうした主張だったのである。

以上にここまでの要點を繰り返したが、このような競争の原因に迫る前に、『金華宗旨』の最後の2種の版本を紹介しておきたい。これらは、蔣元庭本と同じく、北京の乩壇と關係していた。

六、二十世紀初頭の、姚濟蒼と慧眞子による最終版本

ウィルヘルムが翻譯の底本に用いた湛然慧眞子本は、その前に出版された、合道子としても知られる姚濟蒼の版を元にしてしている。姚濟蒼本は、『長生術』という題で出版された。これが、『金華宗旨』の新しい名前となったのである。姚濟蒼が序で語っているように、彼はこの書物を北京の古物商街である琉璃廠で發見し、70部印刷して無料配布することを決めた。琉璃廠で發見された版には、一了山人(1894)なる人物による序のみが含まれていた。他にも序があるはずだと考えた姚濟蒼は、直接、呂洞賓仙人にお伺いを立てることにした。1917年のある夕方、姚と彼の友人である應龍翔は扶乩を行うための乩壇を準備した。この準備は北京の東華門で進められ、彼等の私的な乩壇は、應龍翔の自宅に設立された。呂洞賓は降壇し、この文書は元々、1403年に編纂されたのだが、1663年まで完成しなかったと傳えた（どちらの年代も、最初の啓示が毘陵壇で起こった1668年よりも早いことになっている）。更に呂洞賓は、將來、本來の序が發見されるであろうことを豫

言している。その言葉通り、その直後に姚濟蒼は、河北省の黄梁夢村に設立されていた呂洞賓乩壇の幹事であった、倅なる人物のお陰で、失われていた序を発見する。そして、とうとう1917年には、全てを印刷し終わるのである。

1921年、湛然慧眞子は再び『金華宗旨』を出版する。この折には、1000部が印刷され、それまで未出版であった彼の注釋もつけられた。彼は『長生術續命方合刊』という書名の下、『金華宗旨』と『慧命經』とを併合させた。この版本の序によれば、湛然慧眞子本の前に、少なくとも二つの版本が存在していたと推測することができる。一つは、一了山人の手による版本（1894）であり、もう一つは先に述べた姚濟蒼本（1917）である。更に、湛然慧眞子本からは、『金華宗旨』というテキストが、諸仙の中でも特に呂洞賓を奉る扶乩壇ネットワークの中で伝えられていた、ということがわかる。この版本の内容と構成は、陳謀本と蔣元庭本に非常に近い。しかし、特に陳謀本と蔣元庭本と比較すると、『金華宗旨』最後の版本である姚濟蒼本も湛然慧眞子本も、文學的な序が少ないということがいえる。このことは、『金華宗旨』が乩壇の間で流布しつづけていたことを示すと同時に、陳謀本と蔣元庭本の主要な支持者であった高官や文人たちのコミュニティーからは遠ざかったことを表しているのではないかと思われる。

では、順番が逆になったが、流派間の競争の原因を示唆すると思われる、閔一得編纂の『金華宗旨』第5種本に目を移してみよう。

七、閔一得本と龍門派

第11代龍門派祖師、閔一得の編集を経て、『金華宗旨』は龍門派のネットワークに参入する。この宗派との関係がどういう役割を果たしたのかを知るためには、まず、龍門派が清代においていったいどのようなものを代表していたのかを理解しなくてはならない。龍門派は、全眞教に連なる一流派で、後期王朝期を通じて最も重要な道教の一派であった。佛教の中では、臨濟の宗派が数においても、また制度的にも優勢だった。傳戒を行う特権を独占していたからである。道教においては、龍門派が同じ理由で優勢を誇っていたのである。このことは、『長春道教源流』に記されている。

世稱龍門、臨濟半天下、謂釋之臨濟宗、道之龍門派也。（陳銘珪『長春道教源流』卷6、28b）

世間では、龍門と臨濟は天下を二分すると言われるが佛教の臨濟宗と道教の龍門派のことである。

佛教における臨濟がそうであるように、「龍門」というのは、清代から今日に至るまで、

正統的な道士を意味する、一般的な表象のようなものなのである。道教の寺院に入門するということは、取りも直さず、龍門派の傳戒を授かったということの意味した。この傳戒には、派名を與えることの外に特別な宗教的修練と儀式のやり方が含まれる。これら全ては、全眞系叢林の首座を務める龍門派の方丈によって授けられるのである。十方叢林の中でも最も重要だったのが、首都、北京の白雲觀であった。そこは、龍門派の神話的な開祖であり、全眞教の眞人である邱處機（1148～1227）の墓を擁する聖域なのだ。更に、白雲觀は清代龍門派の指導者であるといわれていた王崑陽（?～1680）の祠堂も有している。素晴らしく空想的な系譜の中で、第7代の祖師とされる王崑陽は、龍門派開宗神話における中心的人物となっている。公開傳戒制度が全中國に伝えられる前に、王崑陽が康熙帝（1662～1722）の後援を得て、その改革をしたのだと言われている。伝えられるところによると、龍門派の名の下に王崑陽によって再興された傳戒は、1656年、白雲觀において、初めて執り行われたのだという。この傳戒は、佛教でいう「新戒堂」のなぞりではないかと思われる、所謂「演鉢堂」において、100日間に渡って行われる。この、世俗から遮断された一定期間の間、受戒者たちは儀式のやり方を授かり、儀禮を學び、そして苦行を行うのだ³²⁾。佛教徒の僧院における傳戒をひな型とした道教の傳戒は、「三壇大戒」として知られていた。これは、初眞戒、中極戒そして天仙大戒から成り立っており、この3種類の戒律、全て授かった人だけが、他人に戒を授ける地位につくことができるのである³³⁾。王崑陽に始まった北京の白雲觀の方丈、つまり龍門派の律師という傳戒の特権を持つ役職は、このようにして、龍門派の方丈によって戒律をうけた道士たちに受け継がれていった。この事實は、龍門派の正統化と、その全中國への流布にとって、決定的なことだったのである。

さて、ここで『金華宗旨』第5種本へ話を戻そう。これから見ていくように、編者の関一得は、この版本の正統性を主張するために、このテキストと王崑陽祖師とを結び付けるのである。この第5種本では、『金華宗旨』の全く新しい歴史が提示されている。この歴

32) 王崑陽「初眞戒律」（『重刊道藏輯要』第24冊、40b～41a所収）及び小柳司氣太『白雲觀志』35、70～73、141～142、162～163頁も参照されたい。「演鉢堂」の意味についてモニカ・エスポジト「清代道教と密教：龍門西竺心宗」（麥谷邦夫編『三教交渉論叢』京都大學人文科學研究所、2005年、209～342頁所収）特に315～316頁、338頁注（117～118）及び339頁注（121～122）を参照。

33) 「初眞戒律」（『重刊道藏輯要』第24冊、40a、10行）では、「天仙戒を受けていないものは、傳戒できない（不受天仙戒者不得傳戒）」と明確に記されている。

史は、関一得自身による序の中で次のように語られている。「『金華宗旨』は神仙・呂洞賓の手によって書かれた。この文獻の核となる部分は、呂洞賓、證道の折の詩である『至教宗旨』から派生したものである。これらの詩句は宋元代を通じて、梓行された状態で傳わってきたものであるといわれている」と³⁴⁾。このように、それまでのテキストとは違い、関一得の序では、『金華宗旨』の起源はより早い時期にある、という説が提案されている。関一得によれば、この書は、1688年の金蓋龍嶠山房にて、7人の醫世、つまり世直しをする素質を持つ人々に對し、「醫世張本」として啓示されたのだという。つまり、扶乩によって『金華宗旨』が下されたのは、7人の淨明道の信徒にではなく、7人の龍門派の祖師たちにであったのだ。しかも、今日の浙江省湖州の外れに位置する小さな山、金蓋山龍門派の祖師たちにこそ、靈示されたのだ、と関一得は主張しているのである。ここでいう、7人の龍門派祖師とは、陶靖菴(1616～1673)、黄隱眞(1595～1673)、盛青崖(fl.1647)などを指す。関一得によれば、扶乩による靈示は江蘇地方の毘陵壇で起きたのではなく、金蓋龍嶠山房の宗壇で起こり、そこで本山の先哲である陶石菴が印刷したのだと言うのである。

八、金蓋山の宗壇と醫世宗

金蓋山の宗壇の傳統は、7人の祖師の最初の2人、陶靖菴と黄隱眞にまで遡る³⁵⁾。1673年にこの二祖が逝去した後、宗壇は陶石菴に引き繼がれたと言われている。これは、関一得によって、『金華宗旨』の印刷を行ったとされている人物である³⁶⁾。この宗壇の傳統は、次のように描寫されている。

34) 関一得序「呂祖師先天虛無太一金華宗旨」『道藏續編』第1冊、1a～1b参照。

「道祖孚右帝君、興行妙道天尊、志在普度、懷有醫世鴻願、乃體『先天虛無太一金華宗旨』十字玄義、著書十有三章、以作後學醫世張本。文由是成、教有是授、天尊玄旨蓋如此。(…)是書道旨、孚右帝君初證道果、四大已化、未及醫世、乃著詩三章、題曰『至教宗旨』。宋元之際、業已梓布、其次章、即是書「逍遙訣」也。是書出於康熙戊辰歲(1688年)、演成於金蓋龍嶠山房、實為陶靖菴、黄隱眞、盛青崖、朱九還、関雪簑翁、陶石菴、謝凝素、諸名宿、皆醫世之材。」

35) 陶靖菴は、金蓋山雲巢支派の開祖であるとされている。「龍門派正宗流傳支派圖」(『金蓋心燈』1b所收)を参照。彼は二つの異なるアイデンティティーを付された準傳説的な人物である。沈浩の名では、明代末の忠臣であり、陶然の名では、金蓋山に隱遁した、清初の道士である。(『金蓋心燈』卷2、9a～22bに所收されている彼の傳記を参照されたい。)雲巢は、関一得が生活した寺院の名前である。

36) 『呂祖師先天虛無太一金華宗旨』に對する関一得の紹介「是書出於康熙戊辰歲、金蓋龍嶠山房宗壇所傳、本山先哲陶石菴先生壽諸梓。」

(…) 上承呂衛之宗，不替邱王律派（「陶石菴先生傳」『金蓋心燈』3卷、1b).

〔それは、〕上は呂（洞賓）と衛（正節）の宗派を繼承し、邱（處機）と王（崑陽）の律派を廢することはなかった。

この宗壇の傳承は、呂洞賓と、金蓋山と関連づけられる地元の人物、衛正節の崇拜に根ざしていたことを意味する。衛正節は有徳の儒家で、宋代の終わりに金蓋山に隱遁し、その地に圖書館をたてた人物である。ここでご紹介した一節は、金蓋山の宗壇を中心に形成された地元信者たちによる權威の需要があったことを明らかにしている点で、重要である。この宗壇の傳は邱處機と王崑陽の律宗をも繼承したのだ。そう主張することで、神話的な創始者と北京の白雲觀における龍門派戒壇の理想的再興者への忠誠を、金蓋山社會は誓っているのだ。ここでいう創始者は龍門派の傳說的開祖である邱處機のことである。良く知られているように、龍門派という名前は、邱處機が龍門山に隱遁して苦行を行なったことに由来している。邱處機という人物は、元代における全眞系十方叢林の設立と結び付けられているのだ。また、ここでいう再興者とは、清代に龍門派の名の下に、邱處機の十方叢林系の傳統、律派を再興した王崑陽を指している。言い換えれば、紹介した一節は地元の信仰を龍門派の指揮の下に置くということで、同意しているのだ。更に、編者閔一得は、金蓋山の『金華宗旨』、つまり「醫世張本」と、その受領者たちを、共に「醫世」という言葉で括っている。この言葉は、より一般的な「濟世」或いは「度世」という表現のなぞりだが、龍門派における新しい宗派である醫世宗と醫世宗の教えである救濟論を特徴づけるという点で非常に重要となる。

『金華宗旨』の第1種本によれば、この書の流傳は太乙派が、淨明道の失われた傳統を復活するために始めたとされていた。しかし、この第5種本では、醫世宗という新しい宗派が、その金蓋山における存在を、正統的全眞系龍門派の枠組みの中で認められるようになっていく。この醫世宗についての更なる情報は、閔一得による注に含まれている。

醫世一宗、律宗之枕祕。(…) 如或不信此理、請讀《碧苑壇經》、得承師訓。謹補述之。（「泄天機」『道藏續編』第1冊、6b.）

醫世宗は、律宗の枕祕である…もし此の理を信じないならば、どうか『碧苑壇經』を讀み、師の訓戒を受けてほしい。私（閔一得）は、謹んでこのこと補い述べておく。

このようにして、所謂醫世宗は金蓋山律宗の祕傳を象徴することとなり、同時に王崑陽によって再建されたとされる龍門正統律宗と竝立することとなったのである。奥儀まで到達できない弟子が師匠の指導の下で讀むようにと指示されているのは、『碧苑壇經』に

所收されている王崑陽の教えのことだ。事實、この『碧苑壇經』は、1663年に、南京の碧苑で行われた戒壇での、王崑陽の講話を記録したものである。さて、閔一得は、この新しい金蓋山醫世宗派を正統化し、また『金華宗旨』をこの地元の信仰と一體化させるために、王崑陽と陶靖菴、黃隱眞との次のような出會いについて語っている。

山本此下載有王崑陽律祖玄論。時爲康熙戊辰秋、律祖自北南來、館於杭城宗陽宮。靖庵、隱眞往謁、呈上此書。律師鄭重其儀、拜而閱之曰：“太上心傳、備於此矣。是乃即世圓行之功法、而淑世功驗亦於此卜、不可偏在一身看。…二三子毋自歎、亦毋自恃、大行正有待也。”乃命小子識之。今故附梓於後、後學者勉之、太定謹白。（「呂祖師先天虛無太一金華宗旨」『道藏續編』第1冊、10b。）

當山の本〔陶石菴の本〕では、このあとに王崑陽律祖の玄論を載せている。康熙戊辰〔1688年〕の秋に律祖は北から南にやって来て、杭州の宗陽宮に泊まった。陶靖菴と黃隱眞が〔そこへ〕行って〔律祖〕に謁見し、この書を贈呈した。律師はその儀を鄭重にし、拜を行ってこの書を閲讀し、そしてこう言った。「太上老君の心傳はこの書に全て備わっている。これはこの世での完全な修行の功法であり、また、世を救う功績もここに豫見されているが、自己一身のことだけに偏ってみてはならない。皆さんは、自ら謙遜することも、また自ら恃むこともあつてはならず、大行〔高い道徳性と品行〕には待つべきものがあるのです。」と。そこで、同士たちに之を識る〔覚える〕ことを命じる。それ故、今梓〔版木〕に附すことにする。後學者の者よ、これに努めよ。〔陶〕太定〔=陶石菴?~1692〕、謹んで申す。

これによれば、1688年に陶靖菴と黃隱眞は王崑陽に『金華宗旨』を贈呈し、王はこの書を、世を救うための太上老君の心傳、「太上心傳」であると認識したというのである。

1688年という、この邂逅があつたとされる時期から始まるこの一節。これが絵空事であるということは明白である。陶靖菴と黃隱眞、更には王崑陽律祖すらも、この出會いがあつたとされる時には、既に亡くなっていた。しかし、閔一得によって創作されたこの傳説は、おおむね、次の3点を示唆している。

(一) 1688年は、閔一得によれば『金華宗旨』が金蓋山の宗壇に扶乩によって靈示された年であり、また、金蓋山の扶乩壇の主要な「マネージャー」である陶靖菴と黃隱眞の二人が、この書を王崑陽に贈呈した年でもあつた。

(二) 龍門派の傳戒の復興者であつた王崑陽は、この文獻を老子から直接流傳したものである、と認定した。

(三) この、王崑陽のお墨付きによって、『金華宗旨』は濟世のための最高の心傳であり、

またそれが今や金蓋山の祖師たちによって奉じられているのであるということが、正式に認定された。

この、最後の点は、金蓋山の人々にとって、非常に重要な含蓄となる。なぜなら、このことは、王崑陽の継承者として金蓋山に開設された、新しい傳戒規範の元となる全ての經典、つまり醫世の經典と、『金華宗旨』とを結び付けることになるからである。こうした方針は、関一得によって記された逸話の中に、次のように記されている。「順治（1644～1661）康熙（1662～1722）年間に王崑陽が白雲觀で傳戒を行った。この時、太上三大戒と呼ばれる正統的訓戒が受戒者たちに授けられた。また、正式な傳戒の儀禮の中で、『呂祖醫世説述』という書物も授けられた。引用文が強調するところによれば、この折の傳戒は公開で行われており、しかも、國家の統制の下で行われていたようだ。派詩、老子から始まる系譜を載せた手卷、律と書も受戒者たちに伝えられた。しかし、王崑陽から3代の後に、この傳戒は失われてしまったのである。今の嘉慶帝の御世（1796～1820）に開かれた演鉢堂では、邱祖の戒律の本は最早伝えられない。近頃の傳戒では『淨明宗教録』の中にそれを求めているが、このテキストは邱祖の伝えるところと同じところ少なく、異なるところ大である。我が金蓋山の先輩たちも戒律を守ってこの邱祖の傳本を焚いてしまった。倅いにも、書は抄録本が残っているが、手卷と律は失われてしまった。」³⁷⁾

つまり、金蓋山に所持されていた醫世という經典のおかげで、この山の祖師たちは今や、順治康熙年間に王崑陽によって首都で再建されたといわれる、龍門正統律宗の、正式な後継者となったのである。特に、同じく金蓋山で啓示され、『金華宗旨』と同じように陶石菴によって印刷された、『呂祖醫世説述』という文獻のおかげで、この山の祖師たちは傳戒を行うことを許されたのだ。『呂祖醫世説述』は、老子の正統な訓示である太上三大戒が白雲觀に伝えられた黄金期を復興する、という目的で製作されたものである。首都の全眞教系叢林で傳戒を再構築した、という王崑陽の理想的な行動を再現することで、金蓋山の祖師たちは今や独自の傳度を正統化したのである。

しかし、金蓋山祖師たちにとって、この傳度は叢林における戒壇において行われるもの

37) 「律祖於順治康熙間五開演鉢堂、付授太上三大戒弟子三千餘人。傳戒衣鉢、有《呂祖醫世説述》、則得受者有三千餘部。豈非眞道之大行乎？況律祖戒堂、開在京邸白雲觀。爾時佛道兩宗傳戒、非奉旨不得私開。其所傳、有律、有書、有手卷。卷中載歷祖支派、自太上而下。所傳戒偈、或五言、或七言、或四言、累代相承無缺。(…)律祖三傳而道遂絕。今嘉慶間所開演鉢、邱祖戒本失傳。近所傳訪諸《淨明宗教録》、與邱祖所傳、小同而大異也。我山先輩、亦守戒焚之。書則録本倅存、而卷律亡矣。」(『皇極闢闢仙經』『道藏續編』第1冊、5b)。森由利亞による翻譯と解説(「呂洞賓と全眞教—清朝湖州金蓋山の事例を中心に」255～256頁)及び拙論(「清代道教と密教：龍門西竺心宗」316～317頁)を参照されたい。

ではなくなっていた。なぜなら、閔一得が主張するように、そうした場での訓示の流傳は正確さに欠け、また邱處機による訓示の本は、『淨明宗教錄』などの一般文獻に置き換えられていたからだ³⁸⁾。一方で、『呂祖醫世說述』や『金華宗旨』など眞の文獻が「太上老君の心傳」であるたった一つの本眞の教を復活できるのは、金蓋山の扶乩壇においてのみであった。邱處機と王崑陽の龍門正統律宗の祕傳を繼承した醫世宗のおかげで、この訓示の直接の流傳が、今や呂洞賓を通じて行われるようになったのだ。金蓋山宗壇での『金華宗旨』は、この過去から現在へと連なる理想的な祖師たちの系譜の中に、その居場所を見つけたのである。

九、結論

最後に、なぜ様々な宗派が『金華宗旨』を私的に適用しようとしたのか、なぜこの文獻が重要であったのかを考えてみたい。タイトルの『宗旨』という言葉が示すように、この文獻には宗派の教義が述べられている。そこには、「傳度」の儀禮と派名の授與を通じて、系譜上の神聖な祖師たちに歸依するシステムが設定されているのだ。これは、太上老君からの直接の傳統が、道教祖師呂洞賓を通じて伝えられたことを表している。實際、この文獻は、「教外別傳」という禪形式の呼稱でも呼ばれている。禪宗における達磨大師のように、呂洞賓は、老子という正統道教の神祕的な宗祖と直接に繋がる、肝心要の人物なのだ。廣く流行した扶乩のおかげで、この結びつきは清代を通じて具象化された。この扶乩という活動は、祖師呂洞賓と人々とが直接的に觸れ合う機会を與えたのである。呂洞賓はそれぞれの宗派が開く扶乩壇に降りてきて、訓示や派名を與えてくれる。こうした直接的コンタクトを通じて、壇徒たちは呂洞賓の門弟であるという認識を抱き、最終的に正統道教の中に融合されていくのだ。確立した宗教團體が内外に扶乩壇を開設するというのは、今日の香港や臺灣においても未だによく目にする現象である。こうした現象は、『金華宗旨』が屬していた後期王朝期の宗教の實態を理解する助けとなる。その歴史は、この書の傳説の

38) 上注37に引用した原文に見られるように、『淨明宗教錄』は嘉慶期(1796~1820)における傳戒儀禮で重要な役割を演じていたとされる。しかし、『重刊道藏輯要』第12冊に見える現行本は、康熙期に胡之政によって編纂された10巻本よりも短い版であるようだ。(卿希泰編『中國道教史』、四川人民出版社、1996年、第4冊、193~194頁を参照。)『重刊道藏輯要』の収録している版は7つのテキストを収めており、そのうちに所収されている『眞詮』及び『純陽祖師降詩』が『道藏』に含められていない。紹介的(前置きの)なテキストである『太上靈寶淨明入道品』(『正統道藏』SN 557)だけが淨明忠孝道の最初の傳度(first ordination)に關する具體的な言及を含んでいる。このテキストはより詳細に研究する必要があるため、現在、清代の道教規範の改正という點から研究を進めている。

作者が呂洞賓であるという傳承を、部分的に形作っている。道教の神話において、八仙の一人に列せられる祖師呂洞賓は、道教徒のアイデンティティーを形成する上で、根幹の役割を演じているのである。最終的に、龍門派の傳戒が中國中に廣まったため、このアイデンティティーは、清代のうちに、全ての全眞系叢林の中に確立された。こうしたアイデンティティーは老子を道祖、呂洞賓を道宗など、明らかに系譜的な呼稱で呼ぶことによって示されている。こうした「家系圖」は（圖1参照）、傳戒において與えられる、授戒の證明書である戒牒、によって明示される標準化された道教アイデンティティーの下に、全ての地元の信仰を集約した。こうした戒牒は（圖2参照）、もともと白雲觀の龍門派方丈の監督の下、國から發行されていた³⁹⁾。今では、白雲觀には道教協會が置かれている。

『金華宗旨』というテキストの歴史は、王崑陽のメガフォンから聞こえる、耳を塞ぎたくなくなるほどの布教喧傳の下に隠された、各地域の道教信仰間での争いの影響を、我々に傳えている。その最前線では、全眞系の天仙派や龍門派が一方に、そして全眞道に連ならない淨明道や太乙金華派がもう一方に對峙しているのだ。蔣元庭や閔一得による序や注釋の行間から読み取れるように、こうした競争は、道教傳統の遺産を相續し、そうすることで正しい傳戒の流傳が保證できるような文獻を取捨選擇する上で起こった。閔一得の注釋は、王崑陽の時代の龍門派の隆盛は、その3代後に「本當の傳戒、太上三大戒の流傳」が中斷された時點で終わってしまったことを示している。金蓋山の祖師たちは、王崑陽の理想的傳戒の流傳に新しい流傳のモデルを浸透させることによって、「改良された全眞道」を再建しようとした。對照的に、淨明道と、恐らくは靈寶儀禮により通じていたと思われる淨明道の分派は、正統全眞道に新しい儀禮の形式を紹介したのである。天仙派にして金蓋山龍門派の祖師たちによるこうした全ての努力にも関わらず、嘉慶帝期に改正されたといわれる傳戒の中では、淨明道が重要な位置をしめているようだ。しかし、一方では、叢林での戒壇から遠く離れた宗壇のおかげで、龍門派というラベルの下の諸支派は、彼等独自の傳統を續けることができたのである。また、派單と呼ばれる（圖3参照）、彼等独自の傳度（initiation/ordination）の證明を發行することも許された⁴⁰⁾。

『金華宗旨』というテキストの歴史は、このように、未だ謎に包まれた清代道教を理解する助けとなる。それは我々に、いつ、どのようにして、そして何故、新しい正統化の論理が生まれてきたのかを教えてくれるのである。『金華宗旨』という文獻を通じて、たく

39) 戒牒の内容については、五十嵐賢隆『太清宮志』、127～129頁を参照。

40) 道教の宗派への入會を認證する派單については、『龍門正宗覺雲道統薪傳』（『藏外道書』第31冊）を参照。

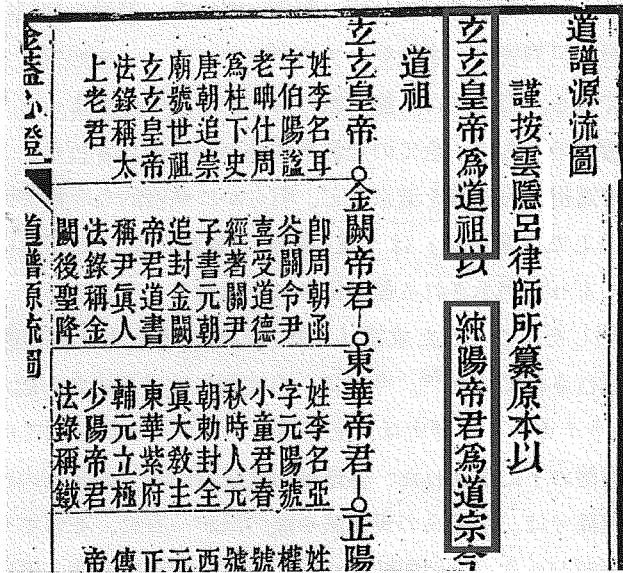


圖1 道譜源流圖 (『金蓋心燈』)

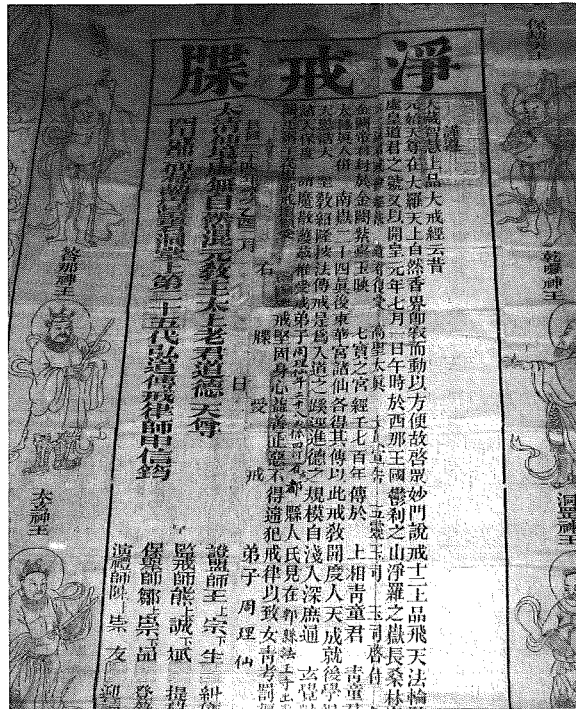


圖2 淨戒牒 (成都青羊宮所藏)

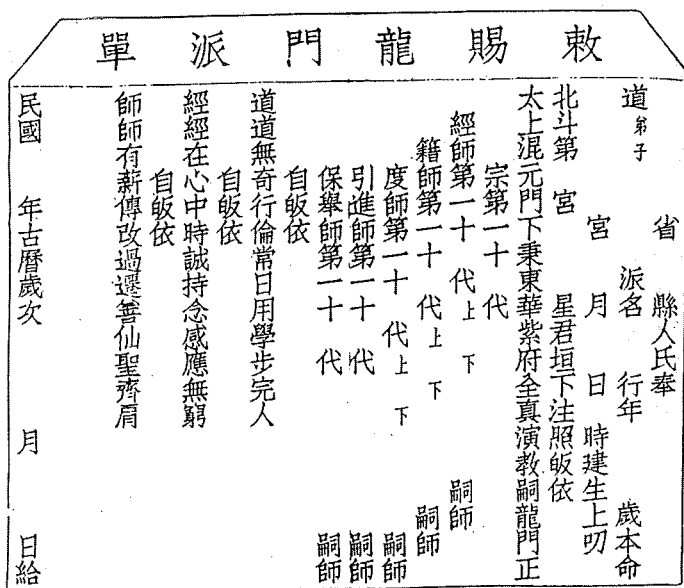


圖3 龍門派單（『龍門正宗覺雲道統薪傳』）

さんの宗派がそれぞれの系譜にまつわる土着の神話を正統化している。また、「全真系龍門派」や「浄明道」など、重要な道教の傳統を持つ表彰の下に、地元で信仰の對象となっている人物たちを正統化しているのである。何よりも、『金華宗旨』というテキストの歴史は、道教流派とそこから生まれてきた新しい宗派の正統化（所謂「オーソドックスの要求」）の過程を指すものであり⁴¹⁾、新しい系譜を正統化するという、彼等の意思を示すものなのだ。そして、こうした系譜の正統化において、呂洞賓という人物がとても重要であったのだ。中國において、こうした素晴らしい經歷を持っていた呂洞賓に、ヘルメス・トリスメギストスやゾロアスターたちとの關係まであったのだとしたら……。それは本當に驚くべきことではないだろうか。

（梅川純代譯）

41) 柳田聖山の禪に関する基礎的研究である『初期の禪史 I』（筑摩書房、1971年）、特に「オーソドックスの要求」と題された章、19頁を参照。

資料A: 邵志琳 編『呂祖全書』49卷『先天虛無太乙金華宗旨』

(序1) 呂祖全書先天虛無太乙金華宗旨小序 [邵志琳小序 乾隆乙未 (1775年)] (資料A-1も参照のこと。)

『呂祖全書』卷49目録

- (序2) 孝梯王宗旨原序 (1692年)
- (序3) 許旌陽宗旨原序 (1692年)
- (序4) 孚佑帝君宗旨自序 (1692年)
- (序5) 張三丰宗旨原序 (1692年)
- (序6) 邱長春真人宗旨原序 (1692年)
- (序7) 譚長真真人宗旨原序 (1692年)
- (序8) 王天君宗旨原序 (1692年)
- (序9) 潘易菴 (乾德) (1692年)
- (序10) 劉度菴 (乾善) (1692年)
- (序11) 許深菴 (乾亨) (1692年)
- (序12) 顧旦初 (日融) (1695年)
- (序13) 莊惺菴 (乾微) (1693年)
- (序14) 屠宇菴 (乾元) (1692年)
- (序15) 張爽菴 (坎眞) (1692年)

『先天虛無太乙金華宗旨』全13章

- (附1) 譚真人垂示五則 (a) 開宗闡教 (b) 淨明源流 (c) 太乙法派 (d) 戒律
- (附2) 邱真人垂示二則 (a) 行持 (b) 授記 (この (a) の行持は、徳を積むことに焦點を當てた倫理的文獻『太上感應鴻文』の暗誦や、『斗母心咒』と『天皇心咒』を日々諷誦すること、また、天尊、九佛、天君など神佛の寶號を暗誦することなどから成り立っている。)

A-1 「呂祖全書先天虛無太乙金華宗旨小序」 [邵志琳小序 乾隆乙未 (1775年)]

金華宗旨一編、出自蘇門吳氏抄本。闡說存心養性之學、多與儒釋二教相同。其初係旌陽眞君受斗中孝梯王之傳、不落言詮文字。所謂淨明大法、忠孝雷霆是也。泊康熙戊申歲 (1668年)、我呂祖奉敕偕邱譚二眞、降壇於毘陵白龍精舍、宣揚宗旨。傳示淨明法派潘乾德等七人。後緣人多物故、星散不齊。孝梯王於康熙壬申 (1692年) 仲夏、復奉帝敕、重提宗旨。時有屠乾元、付茲簡於張坎眞、訂輯成書、兼錄

祖師及諸眞弟子序。時師於古紅梅閣、又授是旨於坎眞等七人。合諸前七人、皆係淨明法派、不在南北兩宗。乃祖師代旌陽闡述宗旨、以詔後學也。夫是書編次之列、與醫卜星相等書、判然迥別、彼則從淺入深、引人入勝、不嫌由輕及重、由顯及微、茲既以《金華宗旨》名篇。自宜以開說《宗旨》淵微、闡明心性筌蹄處、列諸前帙。使學者顧名思義、開卷了然。其餘邱譚二眞之說、非不詳述源流戒律行持大略、而于本旨切要處、了無當焉。張君祇依降筆先後、籠統列爲二十章。前譚眞、次呂祖、終邱眞。不分所言輕重、未免本末失宜。恐後日閱書者、初時展卷、咸目爲金華科儀矣。則於祖師《宗旨》之名、反多岐視。今既採入全書、自應仿照劉本章程。斟酌盡善、何可仍張君原訂、漫無區別也。謹祖師所《宣宗》旨十三章弁首、而譚邱二眞之說、作爲宗旨垂示、附于卷末。其中有立言似非正大、字句涉於舛訛者、悉皆刪正之。庶使後學諸賢、審祖師的要旨、而推類以盡其餘也。設有責以妄易成書者、豫亦何敢辭其罪乎。

資料B: 清・陳謀編／修補『呂祖全書宗正』18卷(9冊)1852年、第10卷(第7冊)『先天虛無太乙金華宗旨』

- (序1) 孝梯王太乙金華宗旨原序
- (序2) 許旌陽眞君太乙金華宗旨原序
- (序3) 孚佑帝君太乙金華宗旨自序
- (序4) 張三丰師太乙金華宗旨原序
- (序5) 邱長春眞人太乙金華宗旨原序
- (序6) 譚長眞眞人太乙金華宗旨原序
- (序7) 王天君太乙金華宗旨原序
- (序8) 屠宇菴題太乙金華宗旨緣起 [金華嗣派弟子屠乾元、記述時期、場所なし]
- (序9) 通宵子金華宗旨識 [嗣派弟子通宵]

『先天虛無太乙金華宗旨』全13章

神霄待宸譚長眞眞人宗旨垂示(目次には、「譚眞人垂示」と省略されて掲載されており、また、この垂示には次の二点のみが含まれている。(a) 開宗闡教 (b) 太乙金華源流。)

資料C: 清・蔣元庭(予蒲、1756～1819)編『全書正宗』16卷1803年、第2卷『孚佑上帝天仙金華宗旨』

(序1) 天仙金華宗旨自序 [呂巖]

(序2) 宏教弟子柳守元

(序3) 列聖寶訓題辭 [(a) 孝梯王; (b) 許旌陽 (c) 張三丰 (d) 邱長春 (e) 譚長真
(e) 王天君]

『孚佑上帝天仙金華宗旨』全13章 (天仙嗣派廣化子惠覺、つまり蔣元庭による最終的注釋付)

(附) 『金華闡幽問答』 (天仙嗣派廣化子惠覺、つまり蔣元庭による最終的注釋付)

(跋1) 天仙太乙金華宗旨後跋 [嗣派弟子通宵]

(跋2) 天仙太乙金華宗旨後跋 [金華嗣派弟子宇菴屠] 正化子法嗣恩洪校注

(跋3) 天仙太乙金華宗旨後跋 [待濟弟子志秋]

資料D: 清・閔一得 (1748～1836) 編『道藏續編』23種 (4冊) 1834年、第1種 (第1冊)

『呂祖師先天虛無太一金華宗旨』

序 金蓋山人龍門第十一代閔一得 道光辛卯 (1831年)

『呂祖師先天虛無太一金華宗旨』 [蔣侍郎元庭先生輯 金蓋山人閔一得訂政]

閔一得による紹介文より始まる。

『中國宗教文獻研究』

平成十九年二月十五日 初版発行

編者 京都大學人文科學研究所

発行者 片岡英三

製本 印刷 亞細亞印刷株式会社

606-8204 京都市左京区田中下柳町八番地

発行所 株式会社 臨川書店

電話(〇七五) 七二一―七一一
郵便振替 〇二〇七〇―二八〇〇

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバーに表示してあります